
黄金のシャンドラッド

鋼野タケシ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黄金のシャンドラッド

【Nコード】

N6760R

【作者名】

鋼野タケシ

【あらすじ】

冒険者に憧れる少年、ガリバー。彼の夢は、伝説のシャンドラッドを見つけて出すこと。手掛かりとなるのは祖父の形見であるシャンドラッドで製造された一枚のコイン。少年はある日、一人の少女と出会う。少女は一枚のコインを持っていた。それはガリバーの祖父が遺したコインと同じものであった。

夢の鍵、未知の扉

第一章『夢の鍵、未知の扉』

ポケットの中に一枚のコインが入っている。

僕らの国で流通しているどの硬貨よりも一回り大きい。作りは粗悪で安っぽく、銀色をしているが銀貨にしては妙に軽い。素材は謎だ。たぶん、売り払ったところで二束三文にしかないだろう。

このコインをじいちゃんはいつても大事そうにしていた。

『見る、ガリバー！ シャンドラッドのコインだ！ シャンドラッドで作られた物に違いねえ！ ああ？ なんてわかるのかだと？

見る！ シャンドラッドの紋章が描かれとる！ 欲しいか？ やらん！』

コインには文様が描かれている。形は真ん中に波線が入った円だ。左半分が太陽で、右半分が月を表わしている。それがシャンドラッドの紋章だと、じいちゃんは言い張っていた。

僕のじいちゃんは冒険者だ。いつでも夢とロマンを追って生きていた。

本当なのかウソなのかよくわからない伝説を信じては、世界中を飛び回る。家にはほとんどいない。何年かに一度フラッと帰って来ては、そのたび僕に冒険譚を聞かせてくれた。

僕も両親もいつも迷惑を掛けられていたけど、僕はじいちゃんが好きだった。じいちゃんの話す冒険譚に目を輝かせていた。

じいちゃんみたいな立派な冒険者になりたいと、子供の頃からずっと思っていた。

その夢は今も変わっていない。

だから僕は、夢をバカにされて激昂した。

「この野郎、もう一度言ってみろ！」

「ああ？ 何度でも言ってやるよ。お前のじいさんは大ホラ吹きのカソジジイだった。くたばってせいせいしたぜ」

潰れそうな酒場で、仕事の無い船乗りたちが昼間から酒を飲んでハクダを巻いていた。

店内はほぼ無人。中に居るのは五人程度。

僕は父の仕事の手伝いで、この酒場に食料品の配達に訪れていた。マスターに賞品と伝票を渡して、帰る途中。僕に絡んで来た相手の顔も知らないし、名前も知らない。

だけど、向こうは違ったらしい。じいちゃんの生前の知り合いらしく、僕の顔を見るなり絡んで来た。最初は無視して通り過ぎようと思ったけど、家族をバカにされたら黙ってはられない。

はげ上がった後頭部に、もじやもじやのヒゲ。男はアルコールで真っ赤になった顔を歪ませて笑っている。

「じいちゃんは大ホラ吹きなんかじゃない！ 冒険者だ！」

「冒険者だあ？ ただの放浪癖だろうが。カソジジイの冒険ごっこに巻き込まれて大ケガした奴だっているんだぜ。まったく、とんでもねえジジイだったな」

「危険を冒すのが冒険だ！ ケガを負うくらいの覚悟は誰だっているはずだろ！」

怒りを込めて睨み付けても、その男は鼻で笑っただけだった。男の仲間たちもバカにするように笑い声を上げた。

「ジジイに似てカソ生意気なガキだぜ」

「あのじいさんもそんな目えしてやがった」

「カソジジイ、暇さえあればくっだらねえ妄想話をでっち上げてやがったなあ。それに騙されて大金貸したヤツもいるが、あの野郎そのまんまくたばりやがったな。大した詐欺師だ……」

我慢の限界はそこまでだった。言い終えるよりも早く、僕は男のヒゲ面にパンチを叩き込んだ。

男がテーブルを巻き込んで倒れる。盛大な音がした。飲みかけだったビール瓶が倒れ、男の顔に浴びせかった。茹で蛸みたいに真

っ赤な顔に血管を浮かべて、男が怒鳴った。

「このクソガキ、ぶっ殺してやる！」

男の仲間たちが素早く立ち上がると、僕を取り囲んだ。

「訂正しろ！　じいちゃんは詐欺師なんかじゃない！」

倒れた男に飛び掛かり、馬乗りになつて胸ぐらを掴み上げる。僕がもう一度殴りかかるよりも早く、男の仲間に振り上げた腕を掴まれた。

鈍い痛み。一瞬の衝撃のあと、僕は地面に倒れていた。顔面を思いつき蹴られたのだらう。頭がくらくらする。鼻がずきずき痛んだ。髪の毛を掴まれ、無理矢理立たされる。丸太のような太い腕から繰り出されるパンチが横面を叩いた。

どこを殴られているのか、それ以上はわからなかった。立ち上がる暇もない。意識がなくなりかけた頃、男たちは笑いながら去っていった。

思い出したらまた傷が痛んできた。

唇が切れて血が固まっている。お腹にも思い切りパンチを食らったから、青黒いアザが出来ていた。男を殴った右手の拳も腫れている。結局、まともに反撃できたのは最初の一発だけだ。

『夢と家族と友人を侮辱されたら戦わなきゃならない。男つてのはそういうもんだ』

僕はじいちゃんの言葉に従った。それで勝てたならカツコイイけど、手も足も出なかった。傷の痛みなんてなんともない。悔しいのはじいちゃんの名誉を守れなかったことだ。

「……どーして、こんなことになったのやら」

呟いても誰も答えてはくれない。僕の情けない姿を見てか、カツプルのくすくす笑う声が心に染みた。

暇な時は街をぶらぶらして、お金がなくなれば働いて、時々こう

してケンカをしては痛めつけられる。

いつか立派な冒険者になる。その夢は夢のまま、僕はこうして楽しくもない日々を繰り返していた。

沖から吹く潮風が火照った肌に心地よい。晴れ渡る空からは、夏の日差しが絶え間なく降り注いでいる。

海の匂いと潮風。それから焼けるような暑い日差しに、港で働く人々の喧噪。

湾岸から陸地に向かって、階段のように建物が並んでいる。長方形の、象牙色の建物。家も商店もすべてが同じ感覚をして、窮屈に並んでいる。

街の中心から真っ直ぐ山の方角に向けて、高架が続く。列車の走る鉄道だ。鉄道は隣町に続き、そこから内陸に向かってどこまでも伸びている。

僕がまだ小さい頃、この街に線路はなかった。よその街との交通は船と馬車、それから徒歩に限られていた。今は鉄道が走るおかげで、街は一層の発展を見せた。

まあ、僕にはあまり関係がない。いくら老人たちが鉄道の利便性を僕に伝えても、高架の上を鉄道が走るのは当たり前前の光景で、しかも実際に乗ったことのない僕には必要性すら感じられない。

円を描くように街は広がっている。どの建物も象牙色の長方形、どこも同じような景色が続いているから、この街を訪れた人間は高確率で迷子になる。

騒がしくて暑苦しい。地中海の玄関口、港街ポートフランク。

この街が、僕の故郷だ。

丘の上に作られた公園。そこで僕はボウツとしていた。何をしているわけでもない。そう、あえて言うなら考え事だ。決して仕事をサボっているワケじゃない。

『男には何もせずに頭を働かせる時間が必要』

よくじいちゃんは言っていた。その言葉が出るのは、昼間っから酒を飲んではあちゃんに文句を言われている時が多かったけど。

僕はここから見える景色が好きだった。すぐ近くの港が見えるし、ポート فرانクの街が一望出来る。独りになるにはうってつけの場所だ。仕事をサボって休むのにもちょうど良い。決してサボることが目的ではないし、今もサボってるわけじゃない。

男には何もせずに頭を働かせる時間が必要だから、こうしているだけなんだ。

「いた……ガリバー！」

甲高い女の声。

ギクリとして振り向くと、エプロンドレスを着た女の子　クロエ・サンドルフがそこに立っている。ショートカットの黒髪に、日焼けした褐色の肌。黙って笑っていれば可愛いんだけど、黙って笑っているなんて有り得ない。性格のきつそうな吊り目を更につり上げて、唇をへの字に曲げている。

「なかなか戻って来ないと思ったら、こんなところで何してるのよ」
彼女は僕に近付くなり、手加減なしの蹴りを僕の背中に叩き込んだ。

「痛ッ！　なにすんだよ！」

「わたし、港ですつと待ってたんだから。朝から二人分働かされるし、ガリバー探しに行けとか言われるし！　こっちの迷惑も考えなさいよ。バカ」

僕はクロエが苦手だ。いつだって偉そうで、口うるさい。いつも怒っている気がする。しかも乱暴だ。小さい頃から何度もケンカして、一度も勝てたためしがない。

「ちゃんと戻ろうと思ってたよ。さっきまでは」

「はあ？　……ねえ、その顔どうしたの？」

彼女が心配するように傷口にハンカチを当てた。さっきは蹴りを食らわせたくせに。

「何でもない」

僕が吐き捨てるように言うと、彼女は途端に不機嫌になった。

「またケンカ？　バカじゃないの、弱いクセにいつもそうやってケ

ンカして。ホントにバカ」

ブツブツと文句を言うクロエを無視して、僕は港に目を向けた。視線の先に、とても大きな蒸気船が見える。

風にはためく旗は見たこともない文様をしていた。どこかの国の商館が船団を率いてやってきたのだろうか。

船には詳しくないけど、小さい頃から港でたくさん船を見てきた。けどあんな大型の船は初めてだ。

あの船に乗っているのはどんな人だろう。商人だとしたら、どこから来たんだろう。売りに来た積み荷は？ 今度は何を積んで帰るんだろうか……。

僕は興味本位で、しばらくその船を眺めていた。船はゆつくりと桟橋に停泊した。

「ちよつと聞いているのガリバー！」

背中を叩かれそうになって、僕は慌ててその手を避けた。

「わかった、すぐに戻るってば。父さんたちにも伝えておいてよ」
彼女を適当にあしらって、僕はもう一度船の方向を見た。

兵隊？

予想に反して、船を降りたのは薄緑の制服を着た集団。遠くだから良く見えないけど、僕には彼らが兵隊に見えた。

じいちゃんが死んだのは、僕が十歳の頃　もう五年も前になる。

息を引き取る二日前、じいちゃんは僕に一冊の手帳を預けた。

すり切れてボロボロになった革の表紙。変色した紙。手帳は分厚く、ページにはゴチャゴチャと汚い字で書き込みがされており、さらにはその上にたくさん紙が貼り付けられている。分厚くなりすぎたページは閉じられず、机の上で勝手にページを開いている。

『おいガリバー。そいつは俺の冒険をまとめた手帳だ。名付けて、

【知恵と勇気を兼ね揃えた偉大なる冒険者ロビンソン・サミュエル

の壮大にしてロマン溢れる夢と栄光の運命に導かれた大冒険記録】
第一巻。二巻以降は絶賛執筆中だ。人生と冒険に大切なことが全部
書いてある……それさえ読んどきゃ、誰だって二流程度の冒険者には
なれる。俺みたいな超一流は簡単になれねーけどな」

じいちゃんは楽しそうに笑った。

だけど僕は心配だった。いつも強気で豪快なじいちゃんが、病気の
せいで弱気になってるように感じた。

まるで自分の形見を預けようとしているように思えたからだ。

『ああ？ 何辛気臭いツラしてやがる！ 俺が死ぬみてえじゃねー
か！ いいか、俺の身体が治るまでにそれを全部読んでおけ。いや
読むだけじゃダメだ、大切なポイントは覚えろ。そしたら、次の冒
険にはお前を連れてってやる！』

「本当？」

だから僕は、じいちゃんの言葉が嬉しかった。

いつもと何も変わらない。ちよつと体調を崩しただけで、普段通
りの強気なじいちゃんだ。すぐ良くなるに決まっている。

吹雪の山で遭難した時も、嵐の海に投げ出された時も、融けた氷
の中から現れた恐竜に追い掛けられた時もじいちゃんは無事だった。
生きて帰って、その冒険を僕に聞かせてくれた。

今回も大丈夫に決まっている。

『男に二言はねーや。俺がやるって言ったらやるんだよ。ただし冒
険は遊びじゃねーぞ。死ぬほど怖い目にも時々遭うし、死ぬほど痛
い目にもたまに遭う。死ぬこともきつとある』

じいちゃんの目は透き通っていて、熱がこもって、冒険を語る時
はいつも輝いている。

僕はじいちゃんの目が好きだった。情熱的でとにかく、カッコ
イイんだ。これが本物の冒険者の目だと僕は今も信じている。

『でもな、その百倍も千倍も、楽しいことわくわくすることドキド
キすることいっぱいだ！ 冒険が上手くいきゃ楽しい！ スリル
がある！ 発見もある！ 金は儲かる！ 女の子にもモテる！』

そう言つて、じいちゃんは悪戯っぽく笑つた。

『何より冒険つてな出会いがある。仲間が見付かるんだ。オレドニア海を荒らし回るシルバー海賊団。学術都市アレクサンドリアの研究生に、水の都エレジアの古物商。それから東方の戦士サムライ。全員俺の友だ』

じいちゃんはたくさんの冒険話を僕に聞かせてくれた。オレドニア海ではキャプテン・チャイルドの財宝を探して海を荒らし回る強靱な海賊団と知り合い、アレクサンドリアでは頑固で融通が利かず残酷で目的のためなら手段を選ばない研究生と意気投合した。金にがめつく人を騙すことに快感を覚える詐欺師の古物商を助けて仲良くなつたのは、エレジアでの冒険話だ。

じいちゃんの冒険話の中でも、僕は特にサムライと出会つた話しがお気に入りだった。東方でじいちゃんは暗殺者ニンジャマスターに狙われ、現地で出会つたサムライと共闘したという。必殺忍法ハラキリに苦戦したと言つていた。

『いいかガリバー。お前は俺のガキの頃によく似てる。度胸があるし頭も切れる。何よりカンが良い！ お前には才能がある！』

冒険者に向いている子だと、じいちゃんをよく僕を褒めてくれた。両親は決して良い顔をしなかったけど、僕は嬉しくてたまらなかつた。

『だからお前は冒険に連れて行く。海の真ん中で夜明けの太陽を見たことがあるか？ 砂漠でオアシスに出会つたことがあるか？ 山の向こうに隠れる古代の遺跡を見つけたことは？ 全部ねえだろ。全部、一度見たら一生忘れられねえ奇跡の瞬間だ。全部、俺が教えてやる』

病気に侵されてもじいちゃんは何も変わらなかつた。冒険者のままだつた。

『だからよ、ガリバー。シャンドラッドを探しに行こうぜ。子供の頃から夢だつたんだ。俺あたくさんの夢を叶えて来たけどよ、シャンドラッドはまだ見つけてねえ。だから俺とお前で、伝説を証明し

てやるんだ』

「いいよ。でも、ちゃんとじいちゃんの身体が治ったらね」

『ああ、約束だぞ』

じいちゃんは安心したように目をつむって、笑った。その二日後、突然容態が悪化して、ぽっくりと逝ってしまった。

好きなことを好きなだけ楽しんだ人生なんだ。大往生だと思う。

あの頃の僕は泣いたけど、悲しいとは思わなかった。ただじいちゃんとの約束を守って、いつか冒険者になってシャンドラッドを見つけてやろうと思った。

だから形見としてじいちゃんの手帳と、じいちゃんが大切にしていたコインを貰った。

それから僕は何もせず、ただ無意味に五年も経ってしまった。

「こんな天気の良い日に、真面目に働くなんておかしいよなあ」

形見のコインを取り出す。太陽の光を反射して、コインは鈍く光っている。

コインを触るのはもうクセになっていた。手持ち無沙汰の時、僕はこのコインを触っている。指で弾いて手の甲に乗せてみたり、手のひらに乗せて太陽の光を反射させてみたり。

手触りが好きだったし、常に手元ないと不安になった。このコインは僕にとって大切なものだ。じいちゃんが辿り着けなかった世界への鍵だから。

首尾良くクロエを巻いた僕は、港に向かっていた。

仕事を手伝うつもりなんてない。

どうせ父さんにやらされる仕事は倉庫の片付けや帳簿の整理、それから時々商品の配達だ。クロエ一人いれば十分に終わるようなものばかりで、僕がいなくなっても何の問題もない。父さんは僕が働きもせずにいることを良く思っていないから、やらなくても済むよう

な雑用を押し付けているんだ。

僕の両親はクロエの父さんと一緒に貿易の仕事をしている。サミユエル・サンドルフ商会と言えばちょっとは名の知れた貿易会社だ。僕とクロエは時々、父さんたちの下で仕事をしていた。

小遣い稼ぎになるからと、クロエは嬉々として働く。僕は父さんの下で働きたいとは考えてない。くだらない反抗心だってわかってるけど、冒険者という夢を理解しない父さんに従うのは何となく悔しかった。

とはいえ、他に仕事のツテもない。本当にお金がなくなった時だけ、僕は父さんの仕事を手伝っていた。

僕が今港に向かってるのは働く為ではなく、さっき見た船に興味があったからだ。遠目に見ても大きな船だ。商船にせよ軍船にせよ、どんな人が乗っているのかは気になる。近くで見てみたい。

港に近付けば近付くほど、街は活気付く。大通りは道路に面した商店が建ち並び、どの店主も大声を張り上げて客を呼んでいる。

僕は軒先に並べられているリンゴを一つ手に取った。美味しそうだ。

「ガリバー。仕事は？」

「今日は休み」

「そうかい。今日も休みかい」

おじさんはヒゲに埋もれた顔をくしゃりと歪めて笑った。僕は何も言わずに代金だけを支払った。

リンゴをかじりながら、ふらふらと港に向かう。

街の中心を貫くように走る大通りは、港から丘、街の出口である北門まで続いている。まだ昼の太陽も高いこの時間、大通りは人で溢れかえっている。

歩くのも一苦労だ。スリにも気を付けないといけない。観光目当てでポートフランクに来た人たちの多くがスリの被害に遭う。

道を歩いていると、薄緑の制服を着た人とすれ違った。あの大きな船から降りてきた一人だろう。妙に細身だけどやっぱり軍人だ。胸に勲章を付けている。でも、見たこともない模様だ。僕らの国の

軍隊じゃない。

外国人だろうか？ きよろきよろと周りを見ながら歩いている。だけど、物珍しさから周囲を見渡しているという感じではない。鋭い目付きで、何かを探しているように見えた。彼は一通り辺りを眺めてから、裏通りに入って行った。

港に戻るつもりだろうか。大通りから繋がる裏路地は複雑に入り組んで迷路のようになっていて。しかもガラの悪い連中のたまり場になっているから、迂闊に迷い込めば痛い目に遭う。

だけど僕は生まれも育ちもポート فرانクだ。この街での生き方は十分身に付いている。忠告くらいはするべきかも知れない。

そう思っ、僕も裏路地に足を向けた。ひもじそうに足下でニヤアニアアと鳴いている猫に食べかけだったリンゴを譲ってやる。

空は晴れ渡り、大通りには太陽の光が降り注いでいる。それなのに、ちょうど建物の影に入る裏通りは日が陰り、妙に薄暗く感じた。いつものクセで、ポケットのコインを手取る。いつ見ても安っぽくて、偽物くさい。

ホントにこれ、何の素材だろ。
どん。

軽い衝撃。何かにぶつかって、指からコインが滑り落ちる。

「きゃあ」

「うわっ……と、すいません」

短い悲鳴。コインに気を取られて僕は前を見ていなかった。

慌ててしゃがむと、落ちたコインを拾う。大切なじいちゃんの見。コレをなくしたら大変だ。

僕はそのまま目線をぶつかった相手に向けた。尻餅を付いて倒れているのは、僕とさほど年の変わらない女の子。

目が合った。頭の後ろで一括りにまとめた金色の長髪に、健康的に日焼けした肌。日の当たらない裏路地で、彼女の黒い瞳はとてもキレイで、輝いて見えた。

美しい、という表現がピッタリと似合う少女だ。

黄金のようにきらめく金髪も、宝石のように光る黒い瞳も、僕は今まで見たことがない。今までに出会ったどんな女性よりも、ずっと美しい。

「あの、ごめんなさい」

その声で我に返る。たぶん、時間にしたら一瞬だけど僕は彼女に見取れていた。

「いや、こっちこそ。前見てなくて」

僕とぶつかった時、抱えていたリュックを落としたようだ。彼女が荷物を拾おうとするのを、僕も手伝おうとした。

手を伸ばしてリュックを拾い上げようとすると、彼女は素早く掴み上げた。

「あ、ありがとうございます」

まるで、僕が盗むのを警戒しているようにも見える。

無理もないか。ポートフランクは治安も良くないし、警戒するのは当然だ。

彼女は立ち上がると、ズボンのお尻に付いた砂をパンパンと払った。彼女の足下に、一枚の硬貨が落ちていた。

気付いていないらしい。僕は渡して上げようとそのコインを拾い上げた。外国のコインだろうか？ 僕らの国で流通している硬貨より、一回り大きい……

「あれ、これは……」

おかしい。これはじいちゃんの形見のコインだ。よくわからない素材で作られた銀色のコイン。粗悪で安っぽい作り。描かれているのは、円形の記号。左側で太陽で右側が月を表わすシャンドラッドの紋章。

「シャンドラッドの、コインだ」

僕が呟くのと同時に、少女は僕の手から慌ててコインを引取った。

「か、返してください！」

その顔は青ざめている。まるで何かに怯えているようにも見えた。

「え……？ いや、それは」

僕のだと、言いかけて止める。

違う。あのコインは僕のじゃない。形見のコインは落とした直後に拾った。

ポケットに指を突っ込む。指先に硬い感触。ポケットに穴なんかも開いてない。間違いなく、コインは入っている。ポケットから出して見ても、やっぱり形見のコインに違いない。

だとしたら、今のコインは？

少女は背を向けると、振り向きもせずに走り去った。港とは反対の、喧噪の大通りへ。

じいちゃんの形見とური二つのコイン。本物は今、僕のポケットに入っている。

心臓がバクバクしている。体中が熱い。指先が震える。僕は今、とても興奮していた。

形見のコインはポケットに入っている。それなら、あの女の子が持っていたものは？ あのコインは何だ？

僕の頭の中に、じいちゃんの言葉が蘇る。

『シャンドラッドで作られたモノだ！』

「……待つて！」

僕は駆け出した。じいちゃんが追っていた伝説のシャンドラッド。あの少女が手掛かりを握っている気がした。

無駄に広いこの街で、一度ぶつかっただけの女の子を探すなんて至難の技だ。

すぐに人並みに隠れて彼女を見失ってしまった。人の流れをかき分けて、カンだけを頼りにあの少女を捜す。

印象に残っているのは馬のしっぽみたいに揺れる金色の髪。日焼けした肌。宝石みたいな瞳。

それから、とにかく綺麗だったこと。彼女の姿が脳裏に焼き付い

て離れない。薄汚れた路地裏に現れた美しい少女。泥の中に宝石というコトワザがあるけど、まさにそれだ。

青果店の前を通り掛かった時、僕はおじさんに声を掛けてみた。

「この辺りで綺麗な女の子見なかった？ 金髪の！」

「二階で寝てるよ。三十年までは綺麗だった女の子ならな」

おじさんは一人でげらげら笑っている。

見付かるはずがないんだ。ポートフランクにどれだけの人間が暮らしている？ 観光客が毎日何人来ると思ってる？

その中のたった一人を見つけ出すなんて……不可能に決まっている。

昼間のこの時間だ。真っ直ぐ歩けないくらいに人が多い。もう少女の姿はどこにも見えない。

「そういや、さっき慌てて走っている娘がいたな。人を無理矢理追い抜いて走ってたよ。後ろを妙に気にしてたっていうか……」

「どっちに行った!？」

「お、おう。あっち。丘の方向」

「ありがとう！」

おじさんが指さした方向に向かって走り出した。すれ違う人たちも何度もぶつかりそうになるが、人並みの間をかきわけるように走った。

やがて、丘の公園に辿り着く。荒い息を吐きながら、周囲を見渡した。不思議そうな目で見られるが、気にしている暇はなかった。

涼しい風が吹く公園の上には、たくさんの人がいる。丘の上から見下ろすと、駅へ向かう階段の下に、小さなリュックを背負った人影が見える。金色の髪が風にたなびいていた。

周囲を気にしながら、彼女は早足で歩いていた。何かに気付いたように、慌てて別の路地に向かって走る。

「……見付けた！」

あの少女が最後の手掛かりなんだ。見失ってしまったら、もうシヤンドラッドへの繋がりがなくなってしまう。

息を整える暇もない。階段を駆け下り、路地を走り抜け、少女を追った。

太陽が傾きかけている。象牙色の建物が夕日の色に燃えている。人が多すぎてなかなか距離を詰められない。少女を追いついて、僕は駅前の広場まで来た。

「待つて！ 僕の話聞いてくれ！」

声を掛けるも、彼女は気付かない。いや、気付いて無視をしているのかも知れない。周囲の人たちが奇異の目で僕を見る。

時々少女は振り向いて僕を見た。僕が追いついて掛けていることに気付くと、彼女は更に走る速度を上げた。

やっぱり、気付いているに違いない。

「なんで逃げるんだ！」

目の前にはポートフランク駅。街中に掛けられた高架は山の向こう、クロスロードの駅まで続いている。

噴水を越えた先に、駅の入り口が広がっている。乗車券を買う窓口に、ホームに繋がるゲート。ゲートの前には駅員が数人立ち、乗車券の確認をしている。

彼女は慌てて乗車券を駅員に見せると、走ってゲートを抜けた。ホームに繋がる階段を上がり、彼女の姿が見えなくなる。

この時間、ポートフランクから出る列車はクロスロード行きの最終便だけだ。列車に乗り込まれたら、もう追いつけない。

僕は走る速度を緩めずに、身をかがめて駅員のわきを走り抜けた。

「あ、おい！ ガリバー！」

誰かの叫ぶ声が聞こえる。それを無視して走る。乗車券を買っている暇なんてない。驚く人々の横をすり抜け、階段を一気に駆け上がる。

線路の上にはクロスロード行きの列車が止まっている。駅の外には夕焼け色の町並み。

息を整えながらホームを見渡す。ホームにはほとんど人がいなかった。視線を巡らせると、列車の扉のすぐ側に金髪の少女が見えた。

列車に乗り込もうとしている。

彼女が列車に乗り込む直前、僕はその手を掴んだ。少女が驚いて振り向く。

「待って！ 話しがしたいんだ！」

少女は何も答えない。怯えたような目で僕を見ている。

「あのコイン！ シヤンドラッドのだろ！？ キミは何か知っているのか！」

焦りばかりが募った。見知らぬ男が追い掛けて来て怖いのはわかる。だけど他に聞きようがない。

じいちゃんが辿り着けなかった世界、僕が憧れている夢。シヤンドラッドの手掛かりを彼女が握っているかも知れないんだ。

「何でもいい！ 何か知っているなら……僕に教えてくれ」

「いや、離して！」

乱暴に手を振り払うと、彼女はキツとするどい眼差しで僕を睨み付けた。

僕はドキドキしていた。シヤンドラッドの手掛かりに近付いたかなのか、彼女の美しさを目の当たりにしているからなのかはわからない。

「シヤンドラッドのことを聞きたいだけなんだ！ キミ、なにか知ってるんじゃないのか？」

「……」

「頼むよ。別にキミに何かしようってんじゃない。本当に、シヤンドラッドのことが知りたいだけだ」

「本当にそれだけなの？ シヤンドラッドのことが……知りたいだけ？」

ようやく話を聞いてくれそうだ。僕は何だか嬉しくなった。

「うん。本当にそれだけ。何も下心なんてないし、危害も加えるつもりもないし……」

「本当に……そんな理由でみんなを殺したの？」

「え？」

キレイな目に涙を浮かべている。彼女は憎しみがこもった目で僕を睨み付けた。

「わたしの兄様も、父様も母様も！ そんな理由で殺されたって言うの？ 許さない。たとえ殺されたって、貴方たちに屈するもんですか！」

「ちよ、ちよと待つてよ！ 何か勘違いしてる……」

震える声で彼女は続ける。

「わたしのことも殺せばいいわ！ でもシャンドラッドの秘密は渡さない。貴方たちに従うくらいなら、死んだ方がマシよ！」

彼女は腕を振り上げた。僕は突然のことで身かわすことも出来なかった。

パン。

彼女の白い掌が頬を打った。頬がじんじんと痛む。

驚く僕を彼女は突き飛ばした。そのまま身をひるがえし、列車の中へ駆け込んで行く。

「あ……ま、待つて」

突然のことに動揺して、すぐに動けなかった。彼女を追い掛けようとした僕の頭を、誰かがガシリと掴んだ。

「ガリバー！ てめえナニしてやがる！」

振り返ると、駅員のジョージが顔を真っ赤にして怒っている。

「ご、誤解だつて。いや誤解じゃないけど、とにかく話はあとで…

…」

頭をガツンと思い切り殴られる。目の前がくらくらした。

「ばかやろう！ 来い！」

ジョージの太い腕に引つ張られて、僕は従わざるを得なかった。彼女の姿はもう見えない。列車の扉が閉まる。

出発を告げる汽笛が鳴った。

彼女を乗せた列車が、出発してしまった。

黄金郷伝説、不老不死伝説というものが存在する。

すべてが黄金で作られた都が地上のどこかにあり、そこに暮らす人々は金粉で自らの肉体を飾り立てている。湯水の如く、使い捨てられるほどの黄金を有すると言われる黄金郷。

生物である以上避けられぬ老いと死の恐怖。その二つを永久に取り除くことの出来る、遙か昔から脈々と伝わる不老不死の伝説。

蛇の飲んだ薬草、人魚の肉、仙人の霊薬、錬金術師のレリクスール。地球上のあらゆる国で、あらゆる伝承で不老不死は姿を見せる。その二つの伝説を併せ持つ、最も有名で最も謎に包まれた都。

それこそが伝説の都、シャンドラッドだ。

シャンドラッドでは何もかもが黄金で作られている。黄金だけではない。人工物はもちろんのこと、木々ですらプラチナのように光り輝く葉を茂らせ、宝石の花々が一面に咲き乱れると言う。

黄金と不老不死。更には現代を遙かに凌駕する科学力がシャンドラッドにはあったと伝えられている。星や月、太陽の運行すら操ったと言われ、宇宙まで自由に行き来し、深海を渡り、あらゆる奇跡を可能とした。

この世の黄金すべてをあわせた以上の財を隠し、永遠の命を与え、神にすら届く科学力を持つ。

シャンドラッドは実在するのか？ 実在すれば、まさに地上の楽園と言える。

あるとすれば、この地上のどこに？

あらゆる地域、あらゆる時代に痕跡と伝説だけを残して、一度も歴史の表舞台に現れないままにシャンドラッドは滅び去った。

なぜ消えたのか？ なぜ滅びたのか？ 答えを知る者は一人としていない。

野心と冒険心を胸に秘めた多くの冒険者が、今なお追い続ける口マン。

今は伝説にだけ名前を遺す幻の都、黄金のシャンドラッド。

僕には不思議でなかった。人々は不老不死なのに、都だけは滅びた。

矛盾している。本当にそんなものが実現したんだろうか？

だから素直にじいちゃんに聞いてみた。

『不老不死なのに滅んだ！ 確かに不思議だな。矛盾しているかも知らん。だがな、だから実在しないってワケじゃない。不老不死なのに滅んだのがどうしてなのか、見つけ出して証明すりゃいい！ あるかないかわからないモノを追い掛ける！ それがロマンってもんだ！』

じいちゃんの言う通りだ。あるかないかわからないモノの手掛かりが今日、僕の目の前にあったんだ。

それなのに、僕の手をすり抜けて行ってしまった……

がつん。

頭に衝撃を受けて、僕は目を覚ました。

「お前な、人の説教の最中に寝るやつがあるか！」

そうは言われても、ジョージの話は長い。僕に説教を始めてから、もう一時間は経っている。意気消沈しているところにこのお説教だ。眠くもなるよ。

「いいかガリバー。お前は昔っから悪戯好きの子供だったな。だがもう子供じゃあないんだ。悪戯じゃ済まされない話だってわかるだろ？ 無賃乗車は犯罪だし、乗車券を買わずに駅に入ることとも犯罪だ。たぶんな。それから俺の説教の最中に寝るのはモチロン犯罪だ！」

たしかに僕は昔っから悪戯ばかりしていたし、ジョージにもたくさん迷惑を掛けた。しかも別に反省してない。本気で反省したことは一度もない。

だけど今回は、悪戯なんかじゃない。夢に繋がる手掛かりをようやく見つけたっていうのに。

僕は落ち込んでいた。唯一の手掛かりだと思っていた少女はもう行ってしまった。

少女が乗った列車。あれが今日最後の列車だ。もう今からじゃ追いつけない。

夢の手掛かりが閉ざされてしまったように感じた。彼女にもう一度会えれば、何かが変わるかも知れないと思った。だけど……ダメだった。明日からも、今日と変わらない日々が待っているんだろうか？

僕が物思いにふけっていると、ジョージがハアと溜息を吐いた。

「聞いてねえだろ、お前。まあ、気持ちにはわかんなくてもない。何も手に付かなくなるとか、他に何も考えられなくなるとかな。俺も若い頃はあれくらい情熱的だった。だが、相手が嫌がってるのに気持ちを押し付けちゃいかん」

「……え？ 何が？」

「後先考えないのは若者の特権だがね。どこで知り合ったんだ、あの子と？」

ジョージはニヤリと笑った。

僕はようやく、彼が何を考えているのかわかった。こういう話しが大好きなんだから困った大人だ。

「そういうんじゃない……知り合ってない。偶然、街でぶつかっただけ」

「街でぶつかったただけの相手を追い掛けたってか？ 一目惚れかあ？ そりゃ運命の出会いだな」

「だから違うってのに！」

結局、ジョージの話はその後一時間続いた。若い頃に駆け落ちとしたとか何とか言ってたけど、どうでもよすぎて内容は忘れた。

駅舎から出た頃、辺りは真っ暗になっていた。空を見上げれば、

トータルイクリプス

月が出ている。そういえば、もうすぐ皆既月食があるらしい。年に一度や二度見られる現象で、月と太陽の位置関係で月に地球の影が映る現象だ。

昔、じいちゃんと一緒に見たのを思い出した。

『すげえぞガリバー。地球の影で月がだんだんと赤くなってく。まるで月が別の何かに変わってくみたいによ』

その夜、僕はとてもワクワクしていた。興奮して疲れてしまったのか、結局月食を見る前に眠ってしまった。

じいちゃんが死んだあと、僕は一人で皆既月食を見た。

「……もしじいちゃんなら、どうするかな」

出るはずのない答えを僕は考えた。

ガス灯に明かりが点され、夜の街を薄明かりで浮かび上がらせている。

振り返って駅を見る。ポートフランクの中心から真っ直ぐ伸びる鉄道。夜の闇の向こう側には、クロスロードの街がある。

彼女の乗った列車は最終便だ。クロスロードで乗り換えて他の街に向かうとしても、明日の朝を待たなければいけない。

だから、列車はクロスロードで停車しているはずだ。あの少女も今、クロスロードにいるはず。

「ガリバー」

ガス灯の薄明かりの下に、人影が立っている。父さんだ。いつものように眉間にしわを寄せて、不機嫌そうに僕を見ている。

「ジョージから連絡があった。お前、仕事にも来ないで何をしている」

怒っているのは一目瞭然だ。それはそうだろう。今まで仕事をサボることは何度もしたけど、騒ぎを起こして家族に迎えを来させるなんてしなかった。

「お前、今年でいくつになった。父さんが十五の頃にはもう、大人と同じように働いていたぞ。お前は勉強もせず働きもせず……いつまで遊んでいるつもりだ？」

僕は何も言い返さなかった。ポケットの中のコインを握んで、握り締める。

「いいか。人にはそれぞれ役割というものがある。使命や運命と言

い換えてもいい。だがそれは誰かが選んでくれるものではない。自らが進んだ道の先に役割を見つけるのだ。お前のように、停滞しているだけでどこにも進まないのであればそれも見つからない。良く考えておけ。このままではお前、じいさんのようになるぞ」

「……それ、どういう意味？」

挑み掛かるように睨む。父さんは動じることなく、真っ直ぐに僕を見返した。

「そのままの意味だ。お前もわかっていているだろう。じいさんには多額の借金があった。迷惑を掛けた人たちも両手で収まる数じゃない。家族を顧みずに家を飛び出し、わたしや母さん……お前のおばあさんだって何度も苦しんだ。お前はそんな人生を送りたいのか？ 良い歳をして冒険者などと……あれは現実を見なかった者の末路だ」

「父さんにじいちゃんを批判する資格なんてない！ じいちゃんは立派な冒険者だった！ 歴史的な発見をしたことだってある！ 父さんはじいちゃんを嫌ってたから、実力を認めたくないだけだ！」
頭に血が登っていた。他人に家族を侮辱されるのも許せないけど、家族に家族を侮辱されるのも許せない。

「良い行いをしたからといって、悪い行いが消えるわけではない。確かに冒険者として有名だったかも知れないが、敵も多かった。あのじいさんがわたしたち家族にたくさん迷惑を掛けたという事実是不変変わらない。お前も良く考える。まともな人生を送りたければな」

話はそれで終わりと云わんばかりに、父さんは僕に背を向けた。
コツコツと足音を立てて遠ざかって行く。

まともな人生。何がまともな人生だと言うのだろうか？ 父さんのようにたくさん金を稼ぐことだろうか。悪事には手を出さず、世のため人のために働いて成功している。父さんのおかげでポートフランクはより活性化した。鉄道を広げて、小さな村とも流通を繋げた。サミュエル・サンドルフ商会のおかげで職を得た人や、生活が豊かになり助かった人の数も数え切れなくらいいるだろう。

誰もが褒めてくれるに違いない。父さんの人生は立派だと。

じいちゃんの人生は立派じゃなかったと思っているんだろうか？
自分の夢を追って、人に夢を与えて生きた人の生き方を『そんな人生』と呼ぶのだろうか。

もしじいちゃんなら、何と答えただろうか。

決まってる。何も言わずにブン殴ったはずだ。

だけど僕は何もできなかった。家族を……尊敬する人を侮辱されて、黙っているしかなかった。

「わかったよ父さん。僕は決めた」

遠ざかるその背中に向けて、僕は独り言のように呟いていた。
振り返ると暗闇の中、ガス灯の明かりで駅が浮かび上がっていた。
もう人通りもない。僕は駅の受付まで走ると、力強く窓をドンドンと叩いた。

ジョージがその音に気付き、窓を開ける。

「なんだガリバー。何か忘れ物か？」

「ジョージさん！ 切符ちょうだい！ 明日の朝一番の列車！」

「あ？ もう窓口は終わりだっての。まあ別にいいんだけどよ……
どうしたんだ、そんなに慌てて」

僕はニヤリと笑って見せた。

「後先考えないのは若者の特権、でしょ？」

ジョージさんは声を上げて笑った。

すぐに引き出しを開けると、一枚の紙を僕に手渡した。

クロスロード行き、一号列車。明日の朝に出る列車のチケットだ。

「ほらよ。今度は上手くやるんだな」

ありったけのお金を払って、僕は列車のチケットを買った。

僕はクロスロード行きの切符を手に、大通りを全力で走った。
昼間の喧噪がウソのように、外は静まりかえっている。大通りも
ほとんどの店が閉まっていて、人の姿がない。何軒か朝まで空いて
いる酒場の仲から、人々の笑い声とランプの光が漏れている。薄暗
い夜の道。通り掛かった酒場の入り口から、三人の男が出て来た。
先頭に立つのはモジャモジャのヒゲに、はげ上がった後頭部。今

日の昼間、僕とケンカをした船乗りだ。つくづく縁があるというか、運が悪いというか。

それでも、ちょうど良いタイミングだ。昼間、こいつには言い忘れていたことがある。

僕は黙って歩き出すと、その男の前に立った。

昼間と同じように、ハゲは酒で顔を真っ赤にしている。相変わらず茹でダコみたいだ。

「ああ？ …… なんだ、クソジジイのクソ孫じゃねえか。またやられてえのか？」

「ガキじゃない。ガリバー・サミュエルだ」

ビシッとその男に指を突き付けた。

「黄金郷シャンドラッドを見付けて、世界一の冒険者になる男だ。覚えておけ！」

船乗りたちは一瞬、虚を突かれたようにきょとんとしていた。すぐに顔を見合わせて、大声を上げて笑い出した。

バカにしたければすればいい。父さんもこいつらも同じだ。誰が何と言おうと、僕の進む道は変わらない。

僕はもう、決めた。

男たちの笑い声を背中に聞きながら、家までの道を走る。

駆け足で家に戻ると、玄関の前でクロエが待っていた。

僕の暮らす家とクロエの家は隣同士だ。元々、僕の両親とクロエの父親が友人で、一緒に事業を始めるためにポート فرانクから越してきたらしい。

両親同士は仲が良いけど、僕とクロエはそうでもない。子供の頃は一緒に遊んだりしたけど。

「おじさんに怒られた？」

「ああ」

まさか、そんなことを聞くためにわざわざ待っていたのだろうか。彼女にしては珍しく、優しそうに笑っている。いつもこんな調子なら良かったのに。僕と二人でいる時、彼女は不機嫌が多い。

クロエはこう見えて真面目だから、僕とは合わないんだ。昔はクロエも僕と一緒に笑っていた気がするけど。

「もうわたしたち子供じゃないんだもの。おじさんだって本気で心配してるんだと思う。わたしのお父さんも言ってたよ。ガリバーは頭も良いんだから真面目にやれば何でも出来るって」

「なんだよ、気持ち悪いな。クロエにそんなこと言われたら鳥肌立つ」

「わたしじゃないから。お父さんがそう言ってただけ。わたしはガリバーのこと、ホントにただのバカだと思ってるもん」

「ああ、そう」

それはそれで腹が立つ。

「反省した？」

「まあね」

ウソではなかった。父さんと話をして、僕は反省した。

この五年間、なにもしてこなかったことを。

「なあクロエ。明日父さんに会ったら伝えておいて」

「自分で伝えればいいじゃない。どうしてわざわざ？」

「たぶん、今日は会わない。明日も会わないだろうし、明後日も会わないと思う」

クロエは怪訝そうに眉を寄せた。

「はあ？ 何よそれ」

あの子はシャンドラッドについて、何かを知っている。

もしあの少女がシャンドラッドの場所を知っていたとしたら？

そこへ至る道を彼女が知っているなら……自分は探すだろうか？

心臓に手を当てる。胸の鼓動が爆発しそうなほど、強くなっている。ドキドキしていた。冒険者になるという夢。ポケットには形見のコイン。手掛かりを握るのは金髪の美しい少女。

今、僕の目の前には未知に繋がる扉がある。

『迷ったら考える。やりたいかどうかで考える。少しでもやりたいと思ったらやれ！』

じいちゃんの手帳に書いてあった言葉だ。

考える。僕はどうしたい？ シャンドラッドを探したいのか？ 冒険者になりたいのか？ それとも父さんの言うように真面目に働いて生きるか？

父さんみたいに、人の役に立つだけの人生なんてまっぴらだ。誰かのためになんて生きたくない。

「僕は旅に出る」

「はあ？ ……え？」

答えは決まってる。僕の人生だ。僕は自分のためだけに生きる。もし夢の世界へ導く鍵があるとするなら、それは今、僕の手の中にある。

形見のコインを握りしめる。決意は固まっていた。

僕は 夢を追う。

呼び掛けるクロエの声を無視して、僕は家に戻った。

時間はない。すぐに冒険に出る準備をしなくっちゃ。朝までに準備を終わらせて、誰にも気付かれないように家を出る。朝一番の列車に乗れば、クロスロードへ辿り着けるはずだ。彼女が列車に乗って遠くへ行くつもりなら、今からでもまだ間に合う。

目指す場所はシャンドラッド。この地球のどこかにある、伝説の黄金郷。

明日の朝、僕はとうとう冒険に出る。

夢の鍵、未知の扉（後書き）

冒・険・活・劇！

少年と少女が出会ったら当然冒険が始まります。冒険活劇ですから。全部で五章程度の予定です。

旅立ちの朝、逃亡の夜

第二章『旅立ちの朝、逃亡の夜』

歴史的発見をした冒険者は多い。著名な冒険者は歴史の教科書にも載っている。

ロビンソン・サミュエル……僕のじいちゃんもその一人。有名なものとして、三十年前にバロビアの海中庭園を発見している。旧メロア期の住居跡を発見したのもじいちゃんだ。

僕も、じいちゃんに負けない冒険者になる。いつか僕の名前だつて、歴史の教科書に載る日が来るかも知れない。伝説の黄金郷、シヤンドラッドを見つけた若干十五歳の若き冒険者。ガリバー・サミュエル。

「……悪くないな」

未来の栄光に想いを馳せると、自然と頬が緩んだ。

まずはあの子を追ってクロスロードへ行く。今のところ、シヤンドラッドへの手掛かりはあの少女しかない。

もしあの子が見つからなかったら？ まあ、なんとかなるだろう。その時は別の手掛かりを探すしかない。

何があるうと、必ずシヤンドラッドを見つける。僕はそう決意していた。

僕が気になっていたのは、彼女の反応だ。まるで誰かに追われているようだった。僕以外の誰かに。

「ま、会って話せばわかるか」

考えたところで答えが出るわけもない。その疑問は一度忘れることにして、何か不備はないかも一度荷物の確認をした。

薄いリュックサックには、荷物がほとんど入っていない。水が少

しと食べ物少し。家からくすねて来た包帯に血止めの薬。それからじいちゃんに昔もらった古い地図。

『宝の地図だ！』と誕生日のお祝いに貰ったものだけど、古すぎて何の役にも立たない。フランセーズ近辺を書いた地図のようだけど、発行されている地図とは地形も微妙に違っているし、今は無人島になった島も乗っている。滅びた村も載ったままだし、新しく切り開かれた道は載っていない。要するに、地図としてはまったく役に立たない。それでもいざとなったら、野宿の時の火付けくらいには使えるだろう。

冒険に出るならたくさん道具が必要になると思ったけど、僕にはそれを揃えるだけのお金がなかった。

昨日の夜、じいちゃんの部屋で使えそうなものを探した。ほとんどの物が捨てられていて、残っていたのは書類や何に使うのかわからないガラクタばかりだ。

押し入れの奥に、古びた拳銃が一丁あった。ずいぶん使い込まれた旧式の火薬拳銃。

拳銃の上から火薬玉を入れ、銃口から弾を詰める。撃鉄を起こして引き金を引くと、撃鉄が火打ち鉄にぶつかり、火花が生じる。その火花が火皿内の火薬玉に引火し、爆発の威力が銃弾を高速で撃ち出す。今は作られていない旧式の拳銃だが、木の板を貫通するくらいの威力はある。

火薬は密封された木箱に入っていたから使えると思う。銃弾も少し残っていたけど、手入れもされずに放っておかれたくらいだ。キチンと発射できるかはわからない。

それでも僕としては幸運だった。武器は攻撃の手段ではなく抑止力。ベルトの前で見えるように拳銃を差して、持っていることを主張する。治安の悪い街の中では、それだけで自衛になる。これもじいちゃんの手帳に書いてあった。

『冒険に出る時、何が必要か知ってるか？』

昔、じいちゃんにそう聞かれたことがある。

「水とお酒とコーヒーと乾パンと乾し肉と、油と噛み煙草とランプと磁石と、寝袋とタオルとロープとストックと、ピストルと弾と火薬とナイフと包帯、薬と、マッチと、火打ち石に……」

冒険小説が大好きだった僕は、主人公たちが冒険の中で使った物を思い付く限り上げていった。

『違う！ お前、何人で冒険に出るつもりだ？ 男が冒険に出る時必要なのは！ 警戒心、好奇心、冒険心！ それから知恵と勇気だ！』

じいちゃんは笑いながら答えた。

本当にあのじいちゃんは、ろくに準備をせずに冒険に飛び出して行くこともあった。

死ぬような目に遭ったと、戻って来る度に笑いながら話していたっけ。

たくさんのは用意できないから、僕は最低限の準備だけをしてきた。動きやすいよう、服は吸汗性の良いシャツとジャケット、下はジーンズと履き慣れたシューズ。

ジャケットの懷に形見の手帳を入れて、ポケットにはいつも通りコインが入っている。万が一落したりしないよう、ジャケットのポケットはヒモで結んで閉められるものになっている。ベルトの前に拳銃、腰の後ろには鞘に入れた短剣を差している。

あとは警戒心、好奇心、冒険心。知恵と勇気は足りないかも知れないけど、旅立つには十分だ。

「行ってくるぜじいちゃん。じいちゃんに負けない冒険者になる」形見のコインを握りしめる。正直に話せば、少しでも不安もあった。だけど今日から、僕の冒険者としての人生が始まる。そう考えたら、わくわくした。

列車の中から、ホームを見渡す。まだ日も昇りきつておらず、ホームにも人は少なかった。別れを惜しむ家族。恋人たちが名残惜しそうに手を繋いで語り合っている。僕の見送りは誰もいない。

結局、昨晚別れてから父さんには会ってない。母さんにも何も話

さなかった。言ったところで反対されるに決まってる。

置き手紙だけは置いて来た。驚くか、心配くらいされるだろうか。いや、きっと勘当されるだろうな。

じいちゃんみたいな冒険者になっても両親は良い顔をしないだろう。特に、父さんは絶対だ。

まあ、親不孝は昔からだ。構いやしないだろう。

ふと頭をよぎったのはクロエのことだった。僕は彼女が苦手だし、彼女だって僕に良い印象はないはずだ。それでも物心付く前からの知り合いではある。

次に会うのがいつになるかはわからない。もう会う機会もないかも知れない。そう考えると、少しだけ寂しかった。

不思議だ。両親と会えないことよりも、クロエに会えないことの方が悲しいのかも知れない。

「ガリバー！」

物思いにふけっていると、聞き慣れた声が響いて来た。

「……クロエ」

動きやすそうな長袖のシャツとジーンズ。彼女にしては、ずいぶんとラフな格好をしている。彼女はいつものように細い眉をつり上げて僕を見た。

「やっぱりいた。絶対、ポートフランクを出るつもりだと思ったんだ。船で行くのかとも思ったけど……」

彼女は息を切らしている。わざわざ港を回って、駅まで来たのだろうか？

僕が街を出ることを告げたのはクロエだけだ。告げたとっても、昨日会った時に一言伝えただけ。それなのに、わざわざ探しに来るなんて。

確かに彼女には『冒険者になる』という夢を何度も語っていた。その度に彼女は僕を馬鹿にした。だけど、本気で信じてくれていたのかも知れない。いつか僕が旅に出るって。

「見送りに来てくれたのか？」

「そんなワケないでしょ」

あつさりと切り捨てられ、僕はムツとした。

「止めたって無駄だよ。僕はもう決めた。子供みたいいつまでも遊んでたりしない。旅に出る。それでじいちゃんみたいな冒険者になるんだ」

「あ、そう。それで、いつ帰ってくるつもりなの？」

止める様子もなく、クロエは僕に聞いた。

「そんなのわからない。一年後かも知れないし、十年後かも知れない。ひよつとしたら、もう二度と帰らないかも知れない」

「ふうん。まあいいわ。どうせわたしには関係ないもの」

「関係ないなら、わざわざこんなところ来るなよな」

僕は少しだけ腹が立った。

たしかに僕とクロエは幼なじみで、別に仲が良いわけでもない。腐れ縁だ。それでも関係ないなんて言われたら気に入らない。彼女のことを考えて感傷に浸っていた僕がバカみたいだ。

「最初の目的地はどこなの？」

「クロスロード。そこから先は、それから考える」

「わかったわ」

彼女はそういうと、背を向けて去ってしまった。僕は呆気にとられて、彼女の背中を見送った。

「なんだよ、いったい……」

わざわざ何をしに来たんだ。僕に何かを告げるでもなく、止めるでもない。本当に、彼女の考えていることは僕には理解出来ない。

僕が座席に座り直すのと同時に、出発を告げる汽笛が鳴った。

扉の閉まる音が聞こえる。僕は少しだけ緊張していた。冒険が始まる瞬間だ。

汽笛を鳴らしながら、列車はゆっくりと鉄道の上を走り出す。

僕は窓から外を見ていた。鉄道は高架の上に建造されているから、眼下に町を見下ろすことが出来る。

ポートフランクの外に出るのは初めてだ。だからこの光景も、僕

は生まれて初めて見た。

ぴかぴかに磨かれた白石の建物、海風に錆び付いたブリキの看板、港に荷を運ぶ馬車の列。毎日見ていたポートフランクの町並みが、今はまるで違つて見える。

これでポートフランクともお別れだ。

列車が緩やかなカーブを曲がり、海が見えた。水平線の向こうから太陽が昇り始めている。朝の光を受けて、水面がキラキラと輝いていた。

旅立ちの朝にはふさわしい。誰にも心配されなくていいし、見送りもなくていい。胸に情熱とロマンがあれば、それだけで十分だ。やっぱり、冒険者の旅立ちつてのはこうでなくちゃ。

僕が物思いに耽つてしていると、連結する車両の扉が開いた。旅行力バンを持った女が入ってくる。

そいつは　クロエは荷台に布のカバンを乗せると、向かい合う目の前の席に座った。

「……何してんの？」

「わたしも一緒に行くから」

「行くつてどこへ？」

「どこつて、クロスロードなんでしょ？」

彼女の言おうとしていることは良くわかる。でも、僕は気付きたくなかった。気付かなければ認めていないことになる。とはいえ、認めないことに意味があるとも思えなかった。

「僕の勘違いでなければいいんだけど。あのさ、ひよつとして僕と一緒に行くつもり？」

「当たり前じゃない」

「はあ！？」

彼女が何を考えているんだか、僕にはまったく理解が出来ない。

「遊びに行くワケじゃないんだぞ！」

「わかつてるわよ。でももう切符買っちゃったもん。列車も出ちゃったし」

「冒険に出るんだよ!? 目的地もないし、身の安全だって保証出来ないんだ! ホントにわかってる?」

「大丈夫、お父さんとお母さんにはちゃんと話して来たから」

どう考えても、旅行に付いて行くくらいの気持ちでいるとしか思えない。だから僕はクロエに苦言をていして、冒険とはどんなものが教えることにした。

「いいかクロエ。冒険ってのは遊びじゃない。死ぬほど怖い目にも遭うし、死ぬほど痛い目に遭うこともある。死ぬことだってある」

「おじいちゃんの言葉でしょ? ガリバーに言われても説得力ない」

「そりゃ……そうだけど。あのさ、ホントにわかってんの? もう家に帰れないかも知れないんだよ」

「じゃあガリバーはもうポートフランクには戻らないつもり? 死ぬつもりで冒険に出るんだ?」

「まさか。家に帰るまでが冒険。途中で死ぬ冒険者は二流。家で死んだ冒険者は一流」

じいちゃんの手帳より。僕の場合は、別にあの家に戻りたいとも思わないけど。

「ならいいじゃない。わたしも一緒に行く。一緒に帰る。それでいいでしょ?」

「いいワケないだろ」

どうやって彼女を説得しようか頭を悩ませていると、彼女は素知らぬ顔で旅行カバンの中を漁っている。

「あつた。はい、預かり物」

「はあ?」

彼女が手にしているのは擦り切れて古ぼけた財布。ぱんぱんに膨れていて、手にとってみるとずっしりと重い。

中には今まで手にしたことないような大金が入っている。ロナパルト金貨、ルイ銀貨、レント銅貨、それからマルス紙幣。全部合わせれば大人が二ヶ月働いた時の給金と同じくらいになる。

「なんだよ、これ」

「おじさんから、饞別だつて。街出る前にキチンと話して来たから。なんだかんだ言つてガリバーのこと心配なんだと思うよ」

「話して来た？　なんで余計なことするんだよ」

僕はその財布をクロエに突っ返した。

「なによそれ。ガリバーが伝えるつて言つたんじゃん」

言つただろうか？　そんなのは見栄というか、格好付けたかっただけだ。

彼女はムツとした表情で僕の手には財布を握らせた。それから僕を叩こうとするのでスルリとよけた。

「ガリバーが危険な真似しないように見張つてなくちゃ。おじさんにもそう頼まれたし」

「危険を冒すのが冒険。危険じゃない冒険なんて、何の意味もないんだよ」

クロエを説得するのは難しい。良く言えば彼女は意志が固く、有り体に言えば頑固で融通が利かない。これ以上いくら話しても、クロエの考えを変えるのは難しいだろう。どちらにせよ、クロスロードまで列車は止まらないんだから。クロスロードに付いてから追いつ返す方が懸命だ。

「せつかく家を飛び出して来たのに、こんなの貰つてたら格好付かないよ」

手には父さんから渡された財布。目の前にはお目付役とも言えるクロエ。こんなの、冒険者の旅立ちにはふさわしくない。

僕は溜息を吐いた。

それでも本音を言えば、クロエが来ると聞いて不安が少しだけ薄らいだ。

たった独りで冒険に出るよりは、クロエだろうと誰かが一緒の方が良いのかも知れない。

クロエだつてもう子供じゃない。わかっているはずだ、冒険に出るといのがどういふことを。危険な目に遭うかも知れないが、彼女なりに考えて出した結論だろう。それなら僕がとやかく口を出

すのは間違っている。

ロマンを感じる心に男も女も関係ない。覚悟と決意があれば誰だって冒険者になれる。じいちゃんの手帳より。

「わたし、一度でいいから旅行つてしてみたかったのよね」

「……」

前言撤回。

クロエと一緒に、独りの方がまだマシかも知れない。

昼を迎える頃、列車はクロスロードに到着した。

山のトンネルを抜けた直後、クロスロードの町並みが目の前に飛び込んできた。赤いレンガの屋根、正午を告げる教会の鐘、灰色の尖塔、街を取り囲む大きな城壁。ポートフランクとは違う。様々な形の建物がある。高架の上から、街を歩く人々も見える。街の様子を見ているだけでもワクワクした。

クロスロードの駅に着き、列車の扉が開く。僕は荷物を抱えて走るようにして席を立った。列車の乗車口から、駅のプラットフォームが見える。ポートフランクよりもずっと広い。初めて、ポートフランク以外の街を訪れた。

今が冒険の第一歩だ！

「さっさと降りなさいよ」

感慨に浸っていると、背中をクロエに蹴られた。つんのめるようにしてホームに降り立つ。なんて情けない一歩目だ。

「なにすんだよ！」

「周りの迷惑でしょ」

彼女は悪びれた様子もない。くすくすと笑う声が聞こえる。僕は気を取り直して、ホームを見渡した。

怒ってなんかいられない。僕の冒険がここから始まるんだ。

ホームはすごく広くて、線路を挟んでいくつものホームがあった。

線路は無数に分岐して、街の至るところに向かって伸びている。ここから内陸の街に線路は広がって行く。クロスロードは大陸の要所を繋ぐ、交通の分岐点なのだ。

駅は広いけど、思っていたよりも人の姿は少なかった。白い制服を着た警官たちが駅の至るところに立っている。彼らは仏頂面で立ち、列車から降りる人たちをじろじろと見回している。

「なに、あれ？」

「警官でしょ」

「見ればわかるわよ」

聞きたいのは僕も同じだった。とはいえ、彼らに話しかけたところで、何をしているのか素直に教えてくれるとも思えなかった。

ホームから繋がる階段を下りれば、クロスロードの街へ出られる。僕らは改札を抜けて外に出た。眩しい太陽の光がアスファルトに反射して輝いている。目の前の広場に多くの人がいる。人の多さで言えばポートフランクも負けてはいないけど、クロスロードは途方もなく広い。

この街の中で、たった一度出会っただけの少女を捜すんだ。

せめて写真の一枚でもあれば人に聞き込みもできるのに。昨日の少女の顔は鮮明に焼き付いているから、記憶だけを頼りに探すしかない。

だけど、見知らぬ土地で名前も知らない女の子一人見つけられるだろうか？

頭によぎった弱気を払拭するために、ポケットからコインを取り出す。このコインを少女も持っていた。シャンドラッドに繋がる手掛かり。コインを見る度に、じいちゃんとの最後の約束が頭の中に蘇る。僕は絶対にシャンドラッドを見つけ出す

「ん……？」

ジッと目を凝らしてコインを見る。太陽の光を反射して、一瞬だけコインの中心が輝いて見えた。虹色の光だ。その光はすぐに消えてしまい、コインの角度を変えても、裏返して見ても、もう同じ輝

きは見えない。

「うわー。すごい人だね。ポートフランクよりいるんじゃない？」
クロエが興奮した声を上げる。たぶん、彼女もポートフランクを出るのは始めてなんだ。

僕はもう一度だけコインを見た。やっぱり、気のせいかな。コインをポケットにしまうと、しっかりとポケットのヒモを結んだ。

ポートフランクにはラフな格好をした人が多い。街の性質上、船員や港で働く人間が多く、着古した作業着やセイラー服の男たちは街のどこにでもいる。荒っぽい人間が多い。だからケンカも日常茶飯事だ。

だけどクロスロードは違う。今、僕の目の前には上等なスーツに身を包んだ上品な紳士、蝶ネクタイなんて締めたお金持ちっぽい男の子が歩いてる。語尾に「ザマス」なんて付けるご婦人は初めて見た。そういう人種がこの街では当たり前のように生活している。やっぱりクロスロードは歴史のある街だ。

「はしゃぐのはいいけど、気を付けてよ。観光客を狙ったスリなんかも多いんだから」

クロスロードの駅前には様々な施設が立ち並んでいる。広場を挟んだ向こう側の通りに、郵便局やホテル、市庁舎なんかも立っている。主要な施設は全部、駅前にあるようだ。市中を走る乗り合い馬車がゆっくりと駅前の道路を走っていた。

「そう、キミの言うとおりだ。クロスロードは良い街だが、自衛の必要はある」

声を掛けて来たのは、燃えるような赤毛の男。ひよろりとした長身で、顔に軽薄そうな笑みを浮かべていた。着古した灰色のコートを羽織っている。

男は僕がベルトに差した拳銃に目を向けた。

「キミたち、観光で来たのかい？ それなら今日は特に気を付けた方が良いな。祭りでは誰も舞い上がるから、財布のヒモも心のヒモも緩む。逆にスリや強盗みたいな悪党たちには仕事がいやすい」

「祭り？ お祭りやってるの？」

興味津々といった様子で、クロエが話に食い付く。

「ああ。神聖ローダリア帝国から偉い人が来ているんだよ。歓迎のパレードも組まれる。ほら、屋台の準備をしているだろ？ 便乗してお祭り騒ぎをしようって魂胆さ。クロスロードの人たちはお祭り騒ぎと酒を飲むのが好きだからね」

男は品の良い笑みを浮かべた。

「来週には皆既月食がある。その日も夜通し酒を飲んで騒ぐ祭りが開かれる。月なんて誰も見上げずにね」

「へえー。わたしたちも見に行こうよ、パレード」

「そんな時間はないよ。話したろ？ あの子を捜さない……」

まだこの時間なら、クロスロードにいるのは間違いない。

とはいえ、どうやって探せば良いのやら。手当たり次第に歩き回るしかなさそうだけど。それが、駅で彼女が現れるのを待つか。クロスロードを出るつもりなら、馬車で山を越えるか列車を使うしかない。

「それは勿体無い。ローダリア皇家の人間を見る機会なんて、一生に一度あるかどうかなのに」

「皇家の人間？ 皇子様？」

クロエの皇子様という言葉聞いて、男は苦笑した。

「あれは皇子様って人相じゃないな。それに、皇家の人間といっても直系じゃない。皇帝の末の弟の三番目の息子、だったかな。皇太子は他にいる。陰謀でも巡らせない限り、皇位も継承出来ないだろう」

男が視線を向けた先に、天幕の掛けられた席があった。広場の一部が封鎖されて、そこに特設の会場が作られている。わざわざ道路の一部分を通行止めにして設営をしていた。恐らくはそこに皇家の人間が座るのだろう。

たしかに僕らの国、フランセーズとローダリアは仲が良い。皇家の人間が来るのなら、歓迎したって不思議じゃないと思う。

「だけど末の弟の三番目の息子だなんて、ずいぶん皇帝からは遠いよね。いちいち歓迎のパレードを組むなんて、どれだけお祭り騒ぎが好きなんだか」

僕が疑問を口にする、男は笑った。

「騒げるチャンスは決して逃さないような街さ、クロスロードは。それに、単純に血筋だけってわけじゃない。神聖ローダリア帝国軍、元海軍提督という肩書きも持っている。知らないかな？ ガブリエル・ファルケンマイヤー提督だ」

男の言葉を聞いて、僕は思わず耳を疑った。

「ファルケンマイヤー！？ 三万の軍勢をたった二千の兵で退けたって、あの伝説の？」

「そう。今は現役を退いてるが、彼の率いるローダリア艦隊は何度もフランセーズ海軍の窮地を救っている。まあ、わたしたちにとっては祖国の恩人を迎えるようなものさ」

フランセーズ共和国と神聖ローダリア帝国は二十年前の戦争中、同盟協定を結んで外敵と戦った。

ガブリエル・ファルケンマイヤー提督といえば、ローダリア軍の中でも英雄的な活躍をした人物だ。

彼の活躍のおかげでフランセーズは危機を乗り越え、両国は今も友好的な関係が築かれている、とかなんとか。

男はうんうんと頷いているが、クロエは顔に疑問符を浮かべていた。

「歴史の授業で習っただろ？ トランバルマー防衛戦とかさ」

「いつの話よ？ 全然覚えてない。ガリバーって変なことばっか覚えてるよね。大事なことはすぐ忘れるクセに」

「僕は記憶力に自信があるんだ。どうでも良いことはすぐに忘れるけど」

「しかしキミ、ずいぶん興味深そうだね」

たしかに面白そうだと思う。あの子を探す目的がなかったら、パレードを見ていくのも良いかも知れない。

彼の言うとおり、外国の皇室の人間を見る機会なんて滅多にないだろうし。それに相手は歴史の教科書に載るような人物だ。見て行きたいと思う。

「ねえガリバー。この広い街で女の子一人捜すなんて無理だよ。いいじゃない、ここでゆっくりしてから次のこと考えれば」

「だから、遊びで来てるワケじゃないってのに」

僕だってあの少女を見つけ出すのが難しいとは思っている。手掛かりは何もなく、名前すら知らない。時間が足りないことはあっても、余ることはない。でも今のところシャンドラッドへの手掛かりは彼女一人だ。彼女を捜すのを諦めるには早すぎる。

「キミたち、旅行者だろう？ この街を出るにせよ、今日の列車はもう出ない。せつかくだし、パレードを見て行けば良さ」

「列車が出ない？ それって、どういうこと？」

「全線、運行中止さ。パレードの警護のためだと言われている。他国のお偉いさんに何かあったら一大事だからね。しかし、パレードの日取りは前から決まっていたというのに、列車の停止は今朝、急に発表された。だから不満もたくさん出ているが、駅員だってお祭り騒ぎをする夜に仕事なんてしたくないだろう」

「それじゃ、今日は街から出られないのね。良い機会じゃない、ガリバー？」

クロエは妙に弾んだ声を上げている。そんなにお祭りに参加したいのだろうか。

「良かったら今日一日、わたしにクロスロードを案内させてくれないか？ 何も世間話がしたくて近付いたわけじゃない。そういう仕事をしているんだ」

男はアクセル・ダンテスと名乗った。街の観光案内を生業にしているとかで、周りを見渡せば彼と同じように旅行者に話しかけている人の姿がチラホラと見受けられる。

「一日の観光案内で四十レントだがどうだろう？ 食堂もホテルも格安で良い場所を紹介できるよ」

僕の財布にはほとんどお金は入っていない。冒険の元手になるような資金すらないんだ。それなのに無駄使いなんて、出来るはずがない。

父さんから預かったお金は使いたくなかった。銀行に預けて、一 Lent も使わずに突っ返す。いや、冒険の成果がお金になったら何倍にもして突っ返してやるのも面白い。

「どうするの、ガリバー？」

いつも不機嫌そうなクロエが妙に楽しそうに微笑んでいる。

やれやれ。

どうせ、列車が出られないなら、あの少女だって街からは出られないはずだ。それに、彼女を捜そうたって行きそうな場所に見当は付かない。適当に街を練り歩くくらいしか方法は思い付かなかった。

それなら、僕とクロエの二人でいるより、街に詳しい人間がいた方が心強い。

「……わかったよ。それじゃ、観光案内を頼もうかな」

僕は不承不承、アクセルと名乗った男の申し出を受けることにした。

ポートフランクが貿易で栄えた街だとしたら、クロスロードは観光で栄えた街だ。観光名所がたくさんある。旧王家の宮殿もあるし、街の外れには観光名所の遺跡もある。

「すっげえ！ 見るよあの塔、五百年も前に建てられたものなんだよ。それなのにあれだけ完璧な状態で残ってるなんて」

「そう。良く知っているね。元々は外敵の監視塔として作られたんだ。太守ウロドロスの監視塔。百年戦争も血の革命もぐり抜けた由緒あるものさ」

監視塔の下部分は近付けないようになっているけど、広場に掛け

られたアーチ上の橋から監視塔の全容を見ることができた。

僕は興奮して、鉄柵から身を乗り出していた。監視塔の高さがよくわかる。突き上げるように高い塔が伸びていた。

「散々反対してたわりに、ずいぶん楽しそうね」

クロエが呆れたような目で僕を見ている。

「見知らぬ土地を巡るつても冒険の醍醐味。酒と食事と景色と出会い！ 古代文明の罾が張り巡らされたような遺跡を飛び回るのだけが冒険じゃない。って、じいちゃんも言ってた」

だから僕が冒険を楽しんでもクロエに対して悪びれる必要はない。僕が言い終えるよりも早く、クロエに背中を思い切り蹴られた。

「次行きましょ、次」

「なんだよ、下からも見てみたいのに」

「時間ないんですよ。ぼさつとしてたら日が暮れるわよ」

「なに、どうせ一日で回れるような街ではないさ。クロスロードの魅力を知り尽くすのなら、一年滞在したってまだ足りない」

アクセルは僕らを見て楽しそうに笑った。観光案内人を勤めているくらいだから、この街にも詳しいだろう。

「……たとえばなんだけど、この街で身を隠すとしたらどこにする？」

もしあの少女が街を出ようとしていないのなら、どこかに隠れて追っ手をやり過ごすだろう。

僕が訪ねると、アクセルは少し驚いたような顔をしてから、訳知り顔で微笑んだ。

「その年で男女二人なら、駆け落ちかい？」

「そんなワケないですよ！」

「痛ッ！　なんだよ！」

なぜか僕がクロエに殴られた。

「ジョーダンさ、ジョーダン。まあ、身を隠すか……隠れて生活しようっていうなら廃墟街かな。あそこは警察の手も伸びないし治安も悪い。一般人がなかなか近付けないって意味じゃ、身を隠すに

はちょうど良いかも知れない」

「廃墟街？」

「ああ……ここからじゃ見えないな。ほら、向こうに外壁があるだろう？」

アクセルの指差した先には、大きな壁が見える。建物の影になってほとんど見えないが、その壁はクロスロードの街全体を覆っている。

彼の説明によれば、昔は街全体がもつと西側にあったという。外壁や監視塔が作られたのがおよそ五百年前。防衛上の理由か予算でも足りなかったのか、建てられた外壁は当時の街すべてを覆うことはしなかった。外壁に囲まれなかった地域は、度重なる戦闘で廃墟になり、住む人々もいなくなった。

いつの頃からか、打ち捨てられたその土地に住み着く人たちが現れた。身寄りのない子供たちや戦争で故郷を失った人々、警察に追われる犯罪者。彼らは生き抜くために結託し、自らを守るために武装した。密かに彼らのコミュニティは肥大化し、気付いた時にはすでに自治体や警察では手の出しようがなくなっていた。

街で生きられない人々が集まったその区画は、やがて廃墟街と呼ばれるようになった。

「とはいえ、^{ルインズ}廃墟人……廃墟に暮らす人間のことだ。そいつらも無秩序ってわけじゃない。クロスロードの街中で法を犯せば、もちろん裁かれる。だから目立った悪事は働こうとはしない」

「なるほどね。見過ごせない存在になれば、警察だって面子がある。下手に動いて、黙殺されてる状況を破ろうとはしないってことか」

「そういうとき。法律には縛られないが、自分たちの規律は守る。それが廃墟人の生き方さ。まあ、わたしのようには真面目だけが取り柄の人間には関係ない話しだな」

アクセルは笑いながら言った。

廃墟街が彼らの言うとおり無法に近い場所であるなら、たしかに隠れるのにうってつけだ。

「そこに行ってみたい。案内してくれないか？」

アクセルは肩をすくめて見せた。

「観光するような場所ではないよ。好奇心で足を踏み入れるような土地じゃないしね。観光なら、街の中にしよう」

「人を探してるんだ。今はこの街にいると思う。ひよつとしたら、その廃墟街にいるかも知れない」

「人探しだって？ よくわからないが……もし他の街から来て廃墟街に隠れてるというなら、身の安全は諦めた方がいいな。よそ者に優しい場所ではないんだ」

「探してるのは女の子だ。間違ってもそんな危険な場所に逃げてるなら、尚更だ。すぐにでも探したい」

僕が言うと、アクセルはとても驚いた。

「女の子だって？ 偶然か……？ いや、悪い。こつちの話だ」

あの少女の顔が脳裏から離れない。あの子は誰かに追われていた。身を隠すために廃墟街に隠れようと考えるもおかしくはないと思う。「だけど、廃墟街に隠れたというのは考えにくいな。別の街から来たなら存在自体知らないだろう？ 街の地図にも観光案内にも載らないような、街の暗部だ。間違つて迷い込むのも考えにくい。一度外壁の外に出ないといけないからね」

「それは……まあ、そうか」

「ねえ、もういいから次に行きましょうよ」

クロエは手に一枚のパンフレットを持っている。粗悪な紙に刷られた絵は、無骨で大きな建物を描いている。大きな丸天井の建物で、四方に尖塔が立っている。

「ウロドロス砦だな。馬車に乗ればすぐ着くさ。ほら、向こうだ。ちようど馬車が来たぞ」

アクセルにうながされて、僕は観光馬車に乗り込んだ。

ガタガタと揺れる馬車は街の中をゆっくりと進む。ポートフランクと違い、クロスロードの町並みは鮮やかで、どこを見ても飽きなかった。この街のどこかに、あの少女はいるんだろう？

やがて馬車は街の門に辿り着く。見上げるほどの高さの門。鉄格子の大扉が開かれたままになっており、その向こう側に舗装された道が続いている。

舗装された道は森を貫き、その向こう側に遺跡はある。

背の高い木々の向こう側。石造りの建造物があった。

遙か見上げるほどの高さの砦。石造りの無骨なものではあったが、歴史を感じさせる雰囲気がある。僕はその素晴らしさに息を飲んだ。遺跡を取り囲む壁は後から作られたものらしい。壁の外側には露店が建ち並んでいた。

「中は広いから迷わないように。一時間後にここに集合で良いかな？」

「アクセルは一緒に入らないの？」

「まさか、そんな野暮な真似しないよ。二人きりにするさ……ジョーダンだ、ジョーダン。怖い顔しないでくれないか。観光案内人の安い収入じゃ、毎回入場料なんて払ってられないんでね。中には地獄もあるし、道順に沿って進めば迷いはしないよ」

アクセルはそう言い残して、手を振って去って行く。

入場門の外から見ても大きかったが、砦は目の前で見ると圧巻だ。まるで壁が迫ってくるように感じる。

この砦にずっと昔、兵士たちが寝泊まりして街道から近付く敵を警戒していたんだ。

兵士。僕の脳裏に、ポートフランクで見た光景が蘇った。

薄緑の服を着た、兵隊たち。彼らは何者だろう？ 海軍の提督が来ているという話だったから、その護衛に船でやって来たのだろうか。

そういえば、街ですれ違った薄緑の制服を着た男は何かを探しているようだった。

あの少女は……シャンドラッドのコインを持った少女は、何かから逃げ回っているように見えた。

家族を殺されたと言った少女。制服を着た軍人たち。何かから逃げていた女の子。何かを探している兵士。

すべて偶然だろうか？ たまたま一日に印象深い出来事が重なったから、無理に関連付けようとしているだけかも知れない。

嫌な想像が頭の中を駆け巡る。他国の偉い人が遊びに来ているからって、列車を一日も止めるか？ それに……アクセルは列車の運行中止が今日発表されたと言っていた。もしローダリア帝国の軍人が彼女を捜しているとして、彼女がクロスロードに入ったことを知ったなら？

彼女を捕まえるために、列車を止めるくらいはするのではないだろうか。

「ガリバー？ 何ボサツとしてんの？」

「え？ ああ、別に」

僕は頭を軽く振って、浮かび上がった想像をかき消した。

考えすぎだ。だいたい、他国の軍人にどうして列車を止めるような権限があるんだ。馬鹿げた妄想に過ぎないし、どうせ真実はあの子と会ってみたいとわからない。

遺跡の中に足を踏み入れると、遺跡の観光案内と思われる女性が立っていた。

「皆は頑強に作られておりますが、建てられてから五百年以上が経過しております。所々、老朽化している部分もございますので、立入り禁止区画には決してお立ち入りなさいませんよう、お願いいたします」

「戦争当時の光景を再現しております。展示物にはお手を触れませんよう、ご協力をお願いいたします」

にこやかな笑顔で観光客に注意事項を告げていた。遺跡に入っすぐ、大広間には剣や槍、弓や甲冑が飾られている。通路で繋がった中庭は兵士たちの訓練場にもなっていたのだろうか。演習に使う木材で作られた人形が立っている。

「おお、すげえ！」

椅子の並んだ部屋には、槍と天秤を持った石像が置かれている。戦いの女神の偶像に間違いない。五百年も前は、戦争に向かう人々は必ず神様に祈りを捧げた。軍隊の中には祈祷師がいて、彼らが戦いの行方を左右する作戦を立てていたという。

全部、本の中で見た光景だ。ここで兵士たちは生活して、ここから戦いに向かったんだ。まるで過去の世界に迷い込んだみたいで、僕は興奮していた。クロエが止めるのも聞かず、僕は遺跡の中を隅々まで見て回った。

これも敵の攻略に対する備えなんだろうか？ 内部は迷路のように入り組んでいた。とはいえ、一部の通路は立入り禁止の札が立てられ、所々に現在地を示す地図が置かれている。キチンと見ながら歩いていれば、迷子になることはないだろう。

そうだ、迷子になるはずがない。

それなのに、どうしてクロエはいないんだ。

気が付くと僕は一人きりだった。いつの間にはぐれたんだろう。内部を見るのに夢中になっていて、彼女のことは気にしてなかった。「まったく……迷子になるなってアクセルに言われただろうに」

一言注意してやろう。見知らぬ土地で警戒もせずにはしゃぎ回ることが冒険者にとってどれだけ致命的で愚かな行為であるか、クロエは全然わかってない。これだから困る。

決して僕が迷子になったわけじゃない。断じて。

来た道をとぼとぼ引き返す。入り口まで戻れば、どこかでクロエとも合流できるだろう。

来た道を引き返しているはずなのに、見知らぬ場所に出た。とても広い回廊で、反対側は影になっていて良く見えない。天上は丸天井になっている。部屋には明かりを取り入れ居る窓も付いておらず、通路のようにランプも灯されていない。目の前には立入り禁止の札。こんな場所、さっき通っただろうか？

決して僕が迷子になったわけじゃない。断じて。

引き返して別の道を進もう。そう思った時だ。

身体が、浮かび上がった。

突然の無重力状態。がらがらと何かの崩れる音。僕は暗闇の中に落ちて、身体中を強くぶつけた。

「痛ってえ……」

どうやら、老朽化していた足下の床が崩れたらしい。ぶつけたお尻と背中が痛いけど、幸い怪我はしていない。

僕が落ちて来た穴を見上げる。高さはそれほどでもない。でも、その穴に登る足がかりになりそうなものはなかった。ジャンプして手を伸ばしてみても、穴のフチには手が届かない。

「まいったな……」

穴の底は真っ暗だった。何も見えない。

「……」

ふと、声が聞こえた。気のせいだろうか。じいっと耳をこらしても、もう何も聞こえない。

まさか、幽霊？　かつてこの砦で暮らしていた兵士たちの亡霊が僕に話しかけて来ているのかも知れない。

背筋がゾクリと震える。もしも亡霊が本当にいるのだとしたら……

…一目で良いから、見たい。

もう一度耳を澄ます。声は上からではなく、前から聞こえて来た。暗闇にも目が慣れ、闇の中に濃淡があるのに気付いた。横は壁になっている。だけど目の前に、穴の先に道が続いていた。

僕は壁に手を当てながら、ゆっくりと前に進んだ。どうせ上には戻れない。それなら前に進むしかない。

「まったくキミたちは、わたしに迷惑ばかりを掛ける」

今度は、はつきりと声が聞こえて来た。この先に、誰がいるんだ。亡霊なんかじゃない。生きた人間の声。僕は少しだけガツカリした。

その声は、会話をしているようだった。僕は歩く速度を速め、声の場所を目指した。足下も見えないから、躓かないように気を付けながら真っ直ぐに進む。

やがて、ぼんやりと明かりが見え始める。

「誤解しないでくれ。危害を加えようなんてつもりはない。わたしはただ話をしたいだけだ」

「アナタに話すことなんて、何もありません」

やはり、声は聞こえた。観光客の楽しむような声ではない。もっと……切羽詰まったような声。言い争う声だ。

「そう怯えることもないだろう。こんなところに逃げ込んでまで、わたしたちが怖かったか？」

「怖くはありません。怯えて逃げ回るくらいなら、死んだ方がよっぽどマシです」

「強情な娘だ。怯えて逃げ回っていたからこんな場所に來たのだろうに」

一つは男の声で、一つは女の子。

少女の声には聞き覚えがある。僕は息を呑んだ。

凄惨な決意を秘めたあの声は、シャンドラッドの手掛かりを握る少女の声だ。

暗さに目が慣れてきた。薄闇の向こうに小さな明かりが見える。

壁のランプに火が灯されていた。

二人だ。闇の向こうに二人いる。

若い男。とはいえ、僕よりはずっと年上だろう。眼鏡を掛けて、軍服をキツチリと着込んでいる。目は鋭く、口元には笑みを浮かべていた。

見覚えはないが、ポートフランクで出会った兵隊たちと同じ服装をしている。男は細身で、兵士というよりは弁護士や公証人のようだ。あの服装と、ベルトに差したサベルがなければ軍人にはとても見えなかった。

「キミの家族が亡くなったのは、不幸な事故だった」

「不幸な事故？ 剣で刺したり拳銃で撃ち殺したりするのが不幸な事故ですか？」

「選択を誤らなければ最悪の結末は回避できた、という意味ではな」

男と向かい合っているのは、金髪の少女。

間違いない。ポートフランクで出会った、シャンドラッドのコインを持った彼女だ。

足音で僕に気付いたのだろう。二人は同時に振り向いた。それぞれ、驚いた顔をしている。

男がサーベルの柄に掛けていた手を放し、腰の後ろに手を回したのを僕は見逃さなかった。

少女と目が合った。驚き、そして警戒しているのがわかる。僕の顔は覚えているだろうか？

彼女が言葉を発するよりも先に、口を開いたのは男だった。

「どこから入って来た？ 出入り口は封鎖されていたはずだ」

少女に背を向けて、男が僕に向き直る。

「道に迷ったんだ。好きで入り込んだわけじゃない」

男は警戒を緩めもせず、自分の背後を指さした。

「真っ直ぐ歩いて行くと良い。出口がある」

「そっか、ありがとう。でも僕、方向音痴でさ。良ければ出口まで一緒に案内して欲しいんだけど」

僕は神経を尖らせて、男の動きを注視した。

「今は取り込み中だね。一人で道も歩けない歳でもないだろう？」

男は口元に、軽い笑みを湛えている。だが、リラックスしているような雰囲気ではない。僕が不穏な動きを見せれば、すぐにでも飛び掛かって来そうだ。

緊張していた。手が汗ばむ。詳しいことはさっぱりわからない。

彼女が何者なのか、男が何者なのか。どうしてここににいるのか。どうして睨み合っているのか。二人に何があったのか。

それでも、やるべきことだけはわかる。

見知らぬ男に、少女が追い詰められている。

やるべきことはただ一つ。

そっ、彼女を助けることだ。

僕の目を見て、男はフツと笑った。

「キミが何を考えているか、当てて見せよう。怪しい場所で、女の子が追い詰められている。きっとこれはただ事ではない。だから助けなくっちゃあ。どうだい、外れたかな？」

「だいたい合ってるよ。そこまで分かってるなら、僕が次に何を言うかもわかるだろ？」

「どうかな。警察を呼ばれたくなかったら金を寄越せ、かい？」

「違うね。黙ってその子から離れろ」

男は笑い声を上げた。面白そうに目を細めて、声を上げて笑う。

その間も、腰の後ろに回した手は動かない。

「どうやら誤解を受けてしまったようだ。わたしが彼女に危害を加えるとても？」

僕に注意を向けているように見えて、男は少女の拳動も見逃さないようにしている。少女が逃げ出せないよう、僕と少女の両方を視界に収められる位置に移動している。

「そうとしか見えないな。まさか、仲良く散歩でもしてるってワケじゃないだろ」

「案外、そんなものかも知れないだろう？ まあ、何も悪事を働いていたのではないさ。迷子を連れ戻しに來ただけだ。さあ、キミも一緒にここを出よう」

男は僕に向かって歩き出すと、笑いながら手を伸ばした。腰の後ろに回していた手を。

一見すると握手を求めているようにも見えた。だが、薄闇の中で僕は見逃さなかった。男の手には拳銃が握られている。

僕はグッと踏み込むと、男が撃鉄を起こす前に突進した。思い切り体当たりする。身構える暇もなく、男は倒れた。

「クソッ！ 何をする！」

「こつちのセリフだ、この野郎！」

男が罵りの声を上げる。拳銃を撃たせないよう、僕は馬乗りになって男の腕を抑え付けた。男は細身の外見からは予想も付かないほどの膂力があつた。腕を抑えきれず、僕は強く頭を殴られてよろめ

いた。

空いた右手で首を締め上げられ、呻き声が漏れる。体勢が逆転し、今度は男が僕を硬い床に抑え付けた。男の左手も抑えきれない。徐々に拳銃を持った左手が上がり、銃口が僕の身体に向けられた。このままじゃ、やられる。

がつん。

そう覚悟した途端、鈍い音が響いた。男の手から力がだらりと抜ける。覆い被さるように僕に倒れ込んで来た。僕はそいつの体を押し退けると、頭の真上に立っている少女を見た。

彼女は蒼白な顔をしている。小さく震えていた。両手にはガレキの塊を握っている。そのガレキで強かに男を殴り付けたようだ。男は顔を腫らし、気を失っている。うめき声を漏らして、床の砂利を握りしめた。

よかった、生きてる。

「に……逃げましょう」

蒼い顔をしたまま、彼女は言った。

思わず笑みが零れる。立ち上がると、僕らは互いに頷き合う。彼女が震えながら手を伸ばしたから、僕は彼女の手を握った。

「逃げよう」

手を握ったまま、僕らは共に走り出した。

もしあの男が撃っていたら、僕は死んでいたかも知れない。心臓が鼓動を強く打っている。ドキドキしていた。恐怖はあまり感じない。不謹慎だと思うけど、身に迫る恐怖よりもスリルを楽しんでいるのかも知れない。

「僕はガリバー！ キミ、名前は！」

回廊の中を駆けながら、僕は叫んだ。

「ベアトリス……ベアトリス・ヴェルヌ！」

彼女には聞きたいことがたくさんあった。彼女自身のこと、あの男のこと、それから、シャンドラッドのこと。

何を聞けば良いんだろう？ 何を言えば良いんだろう？ 頭が混

乱して、ぐるぐる考えが回っている。

「僕は……僕はキミの味方だ！」

今はそれだけ伝えればいい。彼女がそれだけを信じてくれれば。ベアトリスは驚いて、それからコクリと頷いた。僕は彼女の手を強く握り返した。

後方で男の叫ぶ声が聞こえた。銃声と、一瞬の光。よかった、やつぱり生きてる。でももう少し気を失ってくれたら都合が良かったのに。

それでもこの距離と視界の悪さで当たるはずもない。僕らは何度もつまずきながら、広い回廊を走り抜けた。

だけど、どこに逃げる？　ただガムシヤラに走り回るだけじゃ、すぐに追い詰められてしまう。自分が今、どこに居るのかも僕は把握できないでいる。

「真っ直ぐ進んで！　外へ出られます！」

彼女が腕を伸ばした。すると途端に、一筋の光が正面を差しした。彼女の指先から、その光は発せられている。良く見ると、彼女は指の間に小さな筒を挟んでいる。金属の光沢を持つその筒から、小さな光が伸びていた。おかげで足下も前もハッキリと見える。

「説明は後で、急いでください」

驚いている僕に彼女はそう告げると、走り出した。僕も黙って頷き、彼女と共に進んだ。やがて小さな扉を開き、狭い通路は段々と登る坂道になっていた。両手について進む程の急勾配。外から太陽の光が段々と差し込み始めている。やがて光は強くなり、通路は終わりを告げた。葉に隠された扉を開けて、僕らは遺跡の外へと出た。「この道は私しか知りません。ここまではあの人たちも追って来れないはず……」

呟いた彼女の表情は青ざめていた。僕はベアトリスを勇気づけるように頷いた。

「大丈夫。街に詳しい人が居るから。逃げ切れるよ、絶対」

僕たちが出た場所は、遺跡の裏に位置しているようだ。立入り禁

止区画であるのは間違いなく、周囲に観光客の姿はない。どこから回り込んで正面に出れば、アクセルが待っている。そうすれば逃げ切れるはずだ。

遺跡の外周を回って、僕は遺跡の入り口まで戻った。馬車の乗り場が見える。帰りの馬車はまだ来ておらず、乗り場には何人かの観光客が居た。

不機嫌そうに腕を組むクロエと、苦々しく笑って居るアクセルが見える。

「ガリバー！ どこをほつつき歩いて……」

僕がベアトリスを連れているのを見て、クロエはぽかんと口を開いている。アクセルは驚いて、青い目を細めて笑った。

「こいつは……連れの娘が増えているみたいだが？」

「ワケありなんだ、色々」と

そのワケは僕にもわからないけど。

「人のこと放っておいて、何してたのよ」

半眼でクロエは僕の手をジッと見つめている。そういえば、ベアトリスの手を握ったままだ。僕は慌てて彼女の手を離れた。手がじつとりと汗ばんでいる。僕はバツが悪くなり、頬を掻いた。ベアトリスも気まずそうにうつむいている。クロエは不機嫌そうだけど、いつもの機嫌に戻っただけなので気にしないでおく。

「そんなことより、なるべく早くこの場所を離れたい。アクセル、どこか隠れてゆっくり話しができる場所はない？」

「ああ、山ほどあるさ。でもな……無駄だと思っぜ」

「無駄？」

カチャリ、と。金属のこすれるような音がする。動きが自然過ぎて、僕は反応できなかった。

アクセルは懷からナイフを引き抜くと、背後からクロエを抱きかかえるように抑え込み、ノドにナイフの刃を食い込ませる。

「な……」

漏れ掛かった声は途中で止まった。突然の出来事に、クロエも目

を白黒させている。彼女は慌ててアクセルの手を掴もうとして、逆にその腕を抑え込まれる。右の手首を掴まれて、背中に向けてねじ上げられる。クロエが苦痛の声を漏らした。

「クロエ！」

「動くんじゃないよ。俺の手が滑ったらジョーダンじゃ済まねえぜ？ この女が死んでもいいってんなら話は別だけだな」

アクセルは笑っている。今までの穏やかな笑顔ではない。目付きは鋭く、犬歯を剥き出しにして、まるで獲物を狙う猛獣のような印象があった。

「ハハ、よーやく俺にも運が巡って来やがった。まさか獲物の方からこつちに飛び込んで来るとはねえ」

彼の目はクロエでも僕でもなく、ベアトリスを捉えている。

「お前、何の真似だ！」

僕が叫んだ途端、アクセルが刃をクロエの喉元に強く押し当てる。「悪いな、坊や。お前は運が悪い。お前の事情は知らないが……そつちの娘は金の卵を産むニワトリだ。生きて捕まえりゃ金が貰える。そつという約束になってるんだ」

やっぱり、彼女は誰かに狙われている。それはつい先ほど、男に追い詰められているのを見てわかった。まさか、あの制服の男と、アクセルが繋がっていた？ いや、アクセルたち案内人に手回しがされていたと考えるべきだろう。

「普段からこんなことをしてるのか？ 思った以上に治安が悪いな、この街は」

僕は焦りを悟られないよう、拳を握りしめた。

「まさか。いつもは真面目に働いてるさ。臨時のお仕事ってヤツだね。俺たち廃墟人は基本、何でも屋だ。目立つ悪事はしないが、金さえ貰えりゃ仕事は選ばないのが俺の信条だな」

アクセルが喉の奥から漏れるような笑い声を上げる。

「ま、無駄に広いクロスロードでガキ一人見つけれられるとは思ってなかったが……天運ってやつか？ 神様に感謝してえ気分だぜ」

いつの間にか、僕らは取り囲まれていた。太った大男、着古したコート、の長身。まだ僕よりも若い子供。腰の曲がった老人も、女の子までいる。彼らは格好こそそれぞれだが、全員が鋭い目付きで僕らを見ている。突然の騒動に慌てふためく者は一人もない。数は……七人。

観光客を装ったアクセルの仲間なのだろう。最初っから、ここはアクセルたちの縄張りだったってことか。

「わたしが目当てなら、その人は無関係のはずです。放してください！」

ベアトリスが悲痛な声で叫ぶ。

「大人しく俺らに従うってんなら、コイツに危害を加えるつもりはねえよ。おっと、坊主。拳銃はこっちによこしな。抵抗はするなよ……ジャッシュ！ そのガキから銃を奪え」

悔しいけど、今は従うしかない。クロエを人質に取られてる以上、下手は打てない。

太った大男が僕に向かって手を伸ばす。僕は腰のベルトから拳銃を抜くと、銃身を掴んだ。グリップを相手に向けて渡す。

拳銃を受け取った大男は、値踏みするように拳銃を眺めた。

「すげえ、骨董品だぜコレ。高く売れるんじゃないか」

「おいジャッシュ。拳銃はオモチャじゃねえぞ。さっさとしまえ」
アクセルがナイフを持った手で大男に指示を飛ばす。クロエの首からナイフの刃が離れる。

その瞬間、クロエが動いた。

脇腹に肘を叩き込み、アクセルの横っ面を思い切りひっぱたく。

「なにっすんのよ！ バカ！ 変態！」

よるめいたアクセルの反対側の頬に全力のグーを叩き込む。

「うげっ」

情けない悲鳴を上げて、アクセルは尻餅を付いた。倒れたアクセルの腹を、クロエは思い切りつま先で蹴り込んだ。僕以外の男にも怒った時は容赦しないらしい。

隙を逃さず、僕は駆けだした。苦しげに咳き込むアクセルの後頭部を全力で蹴り飛ばす。短い悲鳴を上げてアクセルは転倒した。ナイフが手から離れて地面を転がる。

「クロエ、走れ！」

彼女は黙って頷いた。周りの男たちが大慌てで僕らを捕まえに動く。僕は拾ったナイフをクロエに手渡すと、ベアトリスの手を掴んで走り出した。

「こ、この野郎！」

アクセルの仲間らしき大男が叫び、腕を振り上げた。その手には、僕から奪った拳銃が握られている。

「よせ、撃つな！」

制止の声を上げたのは倒れたままのアクセル。だが、大男は止まらない。

撃鉄は起こされている。銃口は僕に向けられている。男の太い指が、引き金を引いた。

やられる！

バン。

大きな音と、男の悲鳴。

拳銃の銃身が吹き飛んでいた。木と鉄で作られた銃身が焼け焦げ、胸のむかむかするような悪臭を放っている。グリップだけを残して、拳銃は爆発していた。

火傷を負った手を抑えて、男が痛みの声を上げている。赤い血がばたばたと地面に吸い込まれる。砕けた破片だけではない。暴発して千切れ飛んだ男の指も、赤黒い肉片になって転がっている。

「い、痛え！ 痛え、痛えええ！」

顔から大量の汗を流し、目からはボロボロと涙を零している。何が起こったのかわからず、男たちはうろたえていた。

手入れもせずに放っておかれた銃だ。内部で歪みでも起こっていたのかも知れない。それで暴発が起こったんだ。

助かった？ それにチャンスだ！僕はベアトリスの手を引いて

走り出した。クロエがすぐ後続く。

「くそ、追い掛ける！ あの女は逃がすんじゃない！」

アクセルの叫び声。命令された男たちが僕たちの後を駆けて来る。何人かが、僕らの前に立ちはだかった。

「俺が捕まえたなら分け前はずんでくださいよ！」

背中曲がった小男は歯の抜けた口でニヤニヤと笑っている。正装をして観光客に紛れていたみたいだけど、風体はゴロツキそのものだ。男はナイフを引き抜き、僕らに刃先を向けて牽制する。

背後にベアトリスをかばい、男との間に立つ。

このままじゃ、すぐに追い詰められてしまう。どうする……？

「おい、何を騒いでるんだ！」

遺跡の警護をしていた警官だろう。この騒ぎに気付いて、遺跡から出て来たのだ。

ナイフを持った男。腕を抱えて叫ぶ大男。警官は困惑して僕らを見回した。

「危ない、後ろ！」

僕が叫ぶと、警官は驚いて振り返った。彼の視線の先には何も無い。警官振り返った隙に、僕は彼の腰に差してあるサーベルを抜き取った。

「離して！」

振り返ると、歯抜けの男がベアトリスの手を掴んでいる。僕の動きに気付いた警官が手を伸ばすけど、それをするりと避けて歯抜けに接近する。男の手首に向かって、僕はサーベルの腹を叩き付けた。鈍い反動。横から思い切り衝撃を受けて、サーベルは半ばでへし折れた。男が悲鳴を上げて、ベアトリスから手を離す。

「どきなさいよ！」

追いついたクロエが泣きそうな声で叫ぶ。叫びながらもナイフを振り回し、立ちは大なる男たちを牽制する。男たちは情けない悲鳴を上げて道をあけた。よくもまあ躊躇なく振り回せるものだ。間違っ

って刺さりでもしたら後味が悪いだろうに。

「待て、お前たちもだ！　そこを動くな！」

警官が叫ぶ。僕は後ろを振り向いて、警官に向かって折れたサーベルを放った。飛んで来たサーベルの柄を慌ててキャッチする。

「逃げるよ、二人とも！」

騒ぎはどんどん大きくなっている。本物の観光客も気付き、遺跡の入り口には人だかりができていた。遺跡の警官がアクセルたちと格闘を始めている。僕らも捕まえる対象に入っているようだけど、もちろん無視して逃げ出した。

「もうイヤ！　どうしてこんな目に遭うのよ！」

「いいじゃないか、冒険っぽくてさ！　イヤになったら、すぐに帰れよ！」

「ガリバーだけ置いて帰れるわけないでしょ！　なんなのよもう！」

喧噪と争いの音。日が陰り、宵闇に包まれ始める街の中。

騒ぎを後に、僕たちはクロスロードの街へ走り続けた。

旅立ちの朝、逃亡の夜（後書き）

冒・険・活・劇！

実はこの小説、完成してるんです。

でも何度読み返しても、書き直したい。

キャラクターはスゴイ気に入ってるんです。だからこそ書き直したい。

普段は完成と決めた小説の書き直してしないんですけど、書き直しをしないのもそもそも『一つの小説に固執するより、たくさん書いた方が実力になる』っていう考えがあるからなんです。

じゃあたくさん書きながら書き直しすりゃいいじゃん！

と思っ、この小説は書き直しながらお送りしております。

だから二話投稿がこんなに遅いんですかね。

さあ三話目はどうなることやら。

次回も冒険活劇をよろしくお願いいたします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6760r/>

黄金のシャンドラッド

2011年6月11日18時55分発行